

## 重光葵の名著

稲宮 健一

重光葵の「昭和の動乱」は名著である。重光は第一次世界大戦から先の戦争が終結するまで外務官僚として活躍し、昭和の激動の時代を生きた。この著書は戦後巢鴨に収監されている間に執筆したものだ。

その中の支那革命小史の記述によれば、支那は古来易姓革命の国であって、王朝がある世数の政権を維持した後、民意を失って衰運に向かうとともに、英雄豪傑が出現して、力をもってこれを倒し、新たな王朝を樹てる。これは天の命により民意に副ったものだ、天下人は云い、また、一般人民もさよう観念する、と記述している。

明王朝は貧農出の朱元璋が、清王朝は満州族のヌルハチが建国したものだ。いずれも、重光が云う民意を失った前王朝を力で倒し、建国したものだ。時の権力者が一番恐れるのは民心を失って人民に蜂起を起されたり、他民族の襲来であるとする。現在の中国にあっても、再び天安門事件類似が起らないように厳しい言論統制をひいているのはこの習性が染み付いているからだ。西欧の社会でも、フランス革命を端緒として、王権と民衆の力のせめぎ合いがあつた。この中から、民衆の意向を上手に発散させる方策として、代議員制度、議会制度や、任期を決めた権力者の選挙など、安定した社会を築く試行錯誤が繰り返された。しかし、その当時中国では清朝の皇帝支配が続いて、西欧の屈辱的植民地支配に侵されていた。

勿論、現在は世界に覇を競う大国になっているが、底辺の所にかつての失地回復の心情が消えず、その反面教師として、民心の安定より力による民心の誘導に腐心しているようだ。権力者の走っている方向が、世界を安定させる順方向のうちはよいが、逆方向になった時、自国から引き戻す力が働かないと国際間の争いなる。争うを防ぐには自国内で自由闊達な意見の交換ができ、お互いの軋轢が爆発しないよう抑止力が働く社会に成熟することが望まれる。結論から言えば、自国民を信頼することより安定が得られる。

著書では中国を総て支那と称している。